丸山眞男の「歴史意識の古層」について： 『古事記』との関連を中心として

阿部, 裕行

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2014-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010174>

丸山眞男の「歴史意識の古層」について

— 『古事記』 との関連を中心として —

人文科学研究科 日本文学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程3年 阿部裕行

はじめに

本稿でとりあげる丸山眞男の論文「歴史意識の「古層」」は、今日にいたる歴史意識の底に執拗に流れる思考パターンがあるのではないかという視点にたち、「紀記」という資料からそれを取りだそうとしている。丸山によってそこからみちびきだされたのは「つぎつぎになりゆくいきほひ」というフレーズに要約される規定である。このフレーズに要約される思考様式は「歴史意識」の底層に流れ続け、「普遍者の自覚」をさまたげる否定的な要因¹として働いてきたことを論じている。

「古層」には「古層」を越えていく思想が生まれる可能性がふくまれているのではないかと考える筆者は、本稿においても丸山が否定的にとらえた「歴史意識の古層」に、「古層」を越えていく可能性の要因がないかをさぐってみたい。「古層」を越えていく可能性とは、丸山の理念としての思想の基準にしたがうなら、普遍的なもの、超越的なものへの志向があるか、状況にみずから選択的に関与、働きかける主体性の要素があるかである²。丸山が否定的なものとしてこの論文で提示した諸要因のなかに、その片鱗を見出すことが本稿の試みである。

「つぎつぎになりゆくいきほひ」という規定は³、丸山が「紀記」をどう読んだかという「紀記」解釈からみちびきだされている。したがってここでの論考は丸山は「紀記」を、主に『古事記』をどう読んだか、また丸山の読みとはことなる解釈が可能であるかという、『古事記』テキスト解釈の視点からおこなう。

1 「なる」と「うむ」について

『古事記』上巻ではおびただしい数の「成る」が生成を表す語として使われている。『古事記』における生成を考えるうえで「なる」は重要な語である。丸山は「なる」のもつ意味について本居宣長の解釈を引用し(1)「一つには無かりし物の生り出る」(2)「二つには此の物のかはりて彼の物に変化(なる)」(3)「三つには作事(なすこと)の成り終わる」であるとしている。(4)として木草の実の「なる」(5)産業(なりはひ)の「なる」を同語から派生したものとして加えている。それを(1) be born (2) be transformed (3) be completed と英訳する。

さらに生、変、化、為、産、実などが「なる」と読まれ、「生(な)る」はまた「生(あ)る」とも訓ぜられ、あるいはかくれたものが顕在化するという意味で「現(あ)る」にも通じていることをとりあげ、これらの発想には一定の傾向性があることから、これらの意味を包括する「なる」の原イメージがあったのではないか、その原イメージとは「ウマシアシカビヒコジ」の「葦牙」が萌え騰がる景観ではないかと述べているが⁴、この指摘は大変興味深い。言語学的にどうであるか筆者にそれを論じる資格はないが、「なる」の発想に「葦牙因萌騰」が影響をあたえていることは充分考えられる。

丸山は「なる」というときこれらすべての意味をふくんだものとして使うとしているが、上巻にかぎっていえば、「成る」は(1)「無かりし物の生り出る」意として使われている。「葦牙因萌騰」はなにもなかったところに、ある日突然葦の芽が現われ出るといった情景である。「天地初発之時、於高天原成」から始まり、すべての化生する神は、生まれるというよりもなにもなかったところに、おのずから現れ出る神である。英訳では

be born とされているが、上巻での「成る」としては be appeared とでもいうべきではないだろうか。

丸山は生成を表す語として多くの「なる」が使われていることから、『古事記』の生成の基本が「なる」であり、それは「有機物のおのずからなる発芽・成長・増殖というイメージ」から発想された「成長増殖のオプティミズム」に由来するものであるとする。それが「なりゆく」として「歴史意識」をも規定することとなり、そこに「歴史意識の古層」の問題を見出すのである。

『古事記』上巻の生成のなりゆきをみると初めに現れた神々はすべて「成神」である。イザナキ、イザナミの身体は「成り成りて」のちに形をなし、そこから国生みをおこなう。イザナキ、イザナミは生殖行為によって島々を生み、島々を生み終えたのちに神々を生む。生成は「成る」から「生む」に転換するのだが、火の神を生んだことでイザナミは病み「神避」る。そののち生成はふたたび「成る」へともどる。

丸山が指摘するように「二神の生殖行為という段階に一度入りながら、「うむ」論理ははずると「なる」発想にひきずられて」⁵いるのである。たしかに「なる」が『古事記』の発想の中心であることは否定できない。しかし「うむ」もまた『古事記』上巻において重要な役割をはたしている。上巻においては「成る」と「生む」は編者によって自覚的に使い分けられている。編者は「成る」という生成と「生む」という生成には明らかなきちがいがあることを承知し、意図的に書きわけている。とするなら上巻における生成は「成る」一辺倒とはいえないのではないだろうか。なぜ丸山は「なる」のみを問題にし、「うむ」を問題にしなかったのであろうか。

問題にしなかったわけではない。丸山自身『古事記』編者が、「なる」と「うむ」との実質的なちがいを承知していることを認め次のように指摘している。

(1) 『記』の編者はここで「以為生成国土。生奈何」にわざわざ「生を訓じてウムと云ふ。下此に効へ」という訓注をつけている。

(2) 国生みをする場所としてのオノコロ島自体は、二神が引き上げた矛の末からしたたり落ちた塩の累積して「成」ったものであって、二神の「非所生」ざることを後段で、わざわざ訓注してことわっている。

(3) 「成神名」「所成神名」として一々の神名をしるし、ただ、段落ごとにそれまでの化生の由来を一括して述べる際にだけ、「所生神」という書き方をしている。

この箇所以外にも編者が「成る」と「生む」を使い分けしている箇所はあるが、丸山はそれにはふれていない。このように『古事記』の編者が「成る」と「生む」という生成のちがいを自覚的に承知していることを認めているにもかかわらず、丸山はなぜ『古事記』における生成は「なる」中心であるとしたのであろうか。

丸山によれば編者が「なる」と「うむ」の相違について十分承知していながら、あえて「なる」を生成の中心として描いていることによるのである。「なる」を生成の中心とする発想を示す重要な叙述として次をあげている。

(1) 「国生み」という重大な出来事は「なりなりてなり余れる処」と「なりなりてなり合わざる処」との交接の結果としてであり、「なる」が基底にある。

(2) 大八島、さまざまな神々を「共に生み」ながら火神を生んだのを転機としてイザナミは病み、病んだイザナミの嘔吐物・尿などから神々はふたたび化生（成る）する。

(3) 黄泉国から逃げ帰ったイザナキが日向で禊ぎするとき一連の神々は化生（成る）し、化生のクライマックスで三貴子が化生（成る）する。

(4) アマテラスとスサノヲの天の安河でのウケヒでは、アマテラスがスサノヲの剣を乞い受けてできた神、スサノヲがアマテラスの珠を乞い受けてできた神は「於吹棄氣吹之狭霧所成神」である。

このように重大な局面での生成はすべて「なる」であり、圧倒的多数が成神である。イザナキが「生み生みて」といっている場合でも、三貴子はイザナキ、イザナミが生殖行為によって生んだ神ではなく成った神である。二神の生殖行為という段階に一度は入りながら、「うむ」論理ははずると「なる」発想にひきずられているのであって、『古事記』の生成は「なる」であるといわざるをえないということである。

『古事記』における発想の基底にあるのは、丸山が述べるように「なる」であることは否定できない。しかしながら圧倒的な「成る」において編者が「生む」にこだわりつづけていることもまた否定できない。なぜ編者は「生む」にこだわるのであろうか。「成る」と「生む」のちがいについては先学のとりあげるところであるが⁶、編者がなぜ「生む」にこだわったのかについて考えてみたい。

『日本書紀』では「なる」は「所生」「化生」「所為」と表記されているが、『古事記』では一貫して「成」が使われている。ところが上巻では「生る」を「なる」と訓じている箇所が何箇所もある。(イ) 黄泉の国の条、イザナキが逃亡するおりにかずらを投げ捨てると「蒲子生りき」とある。櫛を投げ捨てると「筍生りき」とある。(ロ) 五穀の起源の条では殺されたオオゲツの体から蚕、稲穂、粟、小豆、麦、大豆が発生するがそれらはすべて「生り」と記されている。

(ハ) イザナミが火の神を生んだために病んだとき「たぐりに生れる神の名は」(日本古典文学大系本)とたぐりの場合のみ「生れる」が使われる。「屎」「尿」では「成れる」が使われる。(ニ) イザナキがイザナミの死を悲しみ、死をもたらしたカグツチを斬る。その血から生成された神はすべて「成れる」と記されているが、その注では「御刀によりて生れる神」と「生れり」が使われる。(ホ) 禊祓と神々の生成の条ではイザナキの身につけていたものから神々が生成するが、それはすべて「成れる神」とされている。その注では「身に著ける物を脱くによりて生れる神」とされている。

(ヘ) イザナキが瀬にはいり禊ぎをするとすすいだ水から神々が生まれ、左目を洗うときアマテラス、右目を洗うときツクヨミ、鼻を洗うときスサノヲが生まれる。それはすべて「成れる神」と記されているが、注では「御身を滌ぐによりて生れる神」とされている。

(ト) さらにイザナミは三貴子をえておおいに喜び「吾は、子を生子生みて、生みの終へに三はしらの貴き子を得たり」と述べる。丸山が三貴子は二神の生殖行為によって生まれたわけではないと指摘した箇所である。

「なる」は「成る」とも「生る」とも表記される。(イ)(ロ)についてはいずれも植物の生成にかかわっている。丸山は「なる」の意味として本草の実が「なる」もふくまれるとしているが、「なる」を「生る」と表記するとき「生る」は生物が生れ出るという意味をふくんでいるのであろう。生物、植物の発生を表すために「生る」が使われたと考えられる。(ハ)の使いわけはどうか。日本古典文学大系本では「多具理邇生神名」としているが、新編古典文学全集本では「多具理邇成神名」としている。底本としたテキストによっては「生神」あるいは「成神」と記されているということである。底本によって「生神」としたり「成神」としたままで、これは意図的な書きわけではないとしてよいのではないだろうか。

それ以外の「成」と「生」はどう見るべきだろうか。「成」と「生」のちがいについては、たんに出現を意味する場合は「成」を使い、男女両性の生殖作用よりする出生を意味する場合には「生」の字を使用するといえよう⁷。(ニ)から(ヘ)では地の文では「成」が使われながら、注では「生」が使われている。「生」は生殖作用からの出生であり、身につけたもの、身を滌いだときに出現した神は「成神」であって「生神」ではない。それなのに「生」にこだわったということは、編者はある意図をもって「生神」という表記をしたということである。

その意図とはなにかといえば、すべての神々がたんに出現した神ではなく、イザナキが主体的に関与することで生成した神であることをいわんとしたからである。あたかもイザナキが生んだかのようにいいなしているということである⁸。なぜそうするかといえば、すべての神々がイザナキの系譜に属する神々であることを示すために「生神」としているのである⁹。「成神」をイザナキの系譜につらなる神々とするためには、「成る」という生成でははたされない。たんに出現した神である「成神」は、イザナキが生んだ神である「生神」とすることによって、その系譜に組み入れられることになる¹⁰。編者は「生む」の主体的な働きを承知し、意図的に「生む」を使用しているのである。

(ト)においてもまた同じである。三貴子はイザナキが主体的に働きかけることで生まれたとしたいがために「吾は、子を生子生みて、生みの終へに」といわせているのである¹¹。「[うむ]論理はズルズルと「なる」発想にひきずられている」というよりも系譜を主張するために「なる」発想に「うむ」論理をわりこませている。系譜という相互につながりあう、たしかな系列を成立させるためには、主体的な「生む」という働きかけなしでは成り立ちえないことを、編者は自覚していたのである。二神の結婚の条でイザナキは「以為生成国土。生、奈何」と述べるが、訓注で「訓生云宇牟」としているように「生」と「成」とがことなる生成であることを了解し使われているのである。丸山が指摘するように『古事記』上巻の生成は「なる」が中心であるが、「うむ」も重要な役割を荷なっている。系譜に関していえばむしろ「うむ」が中心であるといえるのではないだろうか。

2 「なる」の主体性と超越的なものへの契機

イザナキ、イザナミは「天沼矛」を海にさしおろし、海をかきまわし、ひきあげるときに矛の先から海水がしたたりおちてオノコロジマができる。「自其矛末垂落塩之、累積成嶋」とある。オノコロジマは「成った」島である。これまでの「成る」は「於高天原成神」「次、成神」と記されているようになかったものが自ずから現れ出ることを「成る」と記していたのだが、ここでの「成る」にはいままでの「成る」にはなかった働きかけがある。ここでの「成る」とこれまでの「成る」とのちがいについて、遠山一郎はオノコロジマは自動詞としての「成」ルから他動詞の「成」スへの変わり目に現れていると述べている¹²。島は自ずから成ったということもできるが、イザナキとイザナミが沼矛を海にさしおろすことによって成ったのであるから、イザナキとイザナミの沼矛をさしおろすという行動によって出現したともいえる。

さらに両神の行動は天つ神の「修理固成是多陀用弊流之国」という詔によっておこなわれる。いわば天つ神の働きかけによって、イザナキ、イザナミの行動はおこなわれたのである。このようにみるとここの「成」に「成」ルから「成」スへと転換する契機があるといえる。しかし「島と成りき」と記されている。他動詞的な意味がふくまれているとしても、ここでの「成る」は自動詞であり、「成る」という生成自体に主体性があるということではない。では「成る」自体に主体性の契機はあるのだろうか。

丸山は「なる」の優位の原イメージとなったものは、おそらく「葦牙」が萌え騰がる景観であろうと述べているが、「無かりし物の生り出る」としての「成る」は葦の旺盛な生命力から喚起されたものであろう。なにもなかった所にある日突然葦の芽が現われ出て、それが天高くのび育っていく。そこに「成る」という生成を見出した。

ここで注目したいのは「葦牙の如く萌え騰がれる物に因りて」という記述である。葦の芽が出現するのは、出現させるなにもものかがあり、そのなにもものかによって葦の芽は出現するということである。「無かりし物」を「生り出させる」なにもものか、その背後にあるという発想である。

木下正俊は日本語の自然現象表現で他動詞とおぼしい動詞を自動詞的に用いる例について述べている¹³。「山越す」「波寄す」「風吹く」「枝刺す」「根張る」「花含む」などの用例をみると、なにもものかが「波をして寄らしむ」「風をして吹かしむ」という古代的な思考がそこにある。そのなにもものかを非人称的主語と名付けている。それは現象を起こさしめる不可思議な力（神）と古代人が考えたものである。

「成る」にも同じような発想がうかがえる。「成る」はなかったものが、ある形をとって現れ出るという現象である。現しめるなにかが背後で働く。『古事記』の考える「現しめるなにもものか」とはなんであろうか。丸山は最初に登場する五柱の別天神のうち、最も重要なのがムスヒの二神、とくに高御産巢日神であるとしている。宣長の解釈にしたがいムスヒのムスは苔ムスのムスであり、ヒは霊力を表すとしている。丸山はムスヒの成長・生成の霊力の発動と顕現をとおして、国土のあらゆるものが生成するととらえている¹⁴。宣長の「世間に有りとはあることは、此の天地を始めて万の物も事業も悉に皆、此の二柱の産巢日大御神の産霊に資て、成り出る」（記伝）にもとづく考えと思われるが、丸山は「世間に有りとはあることは悉く」とはせずムスヒの発現がイザナキ・イザナミの出現で一段落するとしている¹⁵。イザナキ・イザナミ以降は、生成が次の段階に入り、すべてがムスヒの発動と顕現ということではなく、「うむ」と「つくる」が働きはじめて生成がおこなわれることを、それらは「なる」にくらべるとあまりにもよわいことが問題になるのであるが、認めているのである。

では『古事記』における生成の源はムスヒであるといえるのだろうか。生成の源としてのなにもものかを考えるうえで「大八島の生成」の条の冒頭の記述が興味深い。イザナキ、イザナミは最初の子生みに失敗したのち、天つ神にうかがいをたてる。いずれの神とも記されていないが、天つ神とあることからしてタカミムスヒもふくむ最初に現れた神であろう。そのとき天つ神は「布斗麻邇爾ト相而詔之」のである。最高神であるはずの天つ神は、自らを越えたなにもものかに神意を乞うのである。

この問題を最初に指摘したのは和辻哲郎である。和辻は天つ神が神意を乞うたものを「神々の根原でありながら、限定されることのない不定の神の意志」¹⁶、また美化して「神聖なる無」¹⁷としている。一方丸山は最

高神がさらに神意を乞う点に「祭祀の究極の対象は飄々とした時空の彼方に見失われる」¹⁸と述べ、日本の神の無限定性を見出す。最高神さえ越えるなにものかとはなにか。ムスヒであるかどうかは『古事記』に記されていない。最高神でさえその神意をうかがう、なんらかの霊力を現象の背後に感じとろうとする発想をここに見出すことができる。木下の言葉をかりるなら、それはすべての現象の背後にある非人称的主格ともいべきものである。それを究極者ということとはできない。しかし天つ神をも越える超越的ななにものかへの原始的、宗教的思いへの契機がそこにあるといえないだろうか。

3 「つくる」について

丸山は世界の諸神話の創世論の根底にある基本動詞として「つくる」「うむ」「なる」をあげる。主体性という点からすると「つくる」「うむ」は主体的に他に働きかけることにより、なにかを作る、なにかを生むのである。「なる」においては働きかける行為者がなく、自ずからなにかが現れ出る。「つくる」と「なる」が両極にあり、「うむ」はその中間にある。『古事記』では「なる」発想の磁力が強く、「うむ」を「なる」の方向にひきこむ傾向があり、「つくる」論理におけるような主体への問いと目的意識性ははっきりと現れ出ないということである¹⁹。

たしかに『古事記』ではおびただしい数の「なる」が使われ、「うむ」「つくる」はそれにくらべ使用頻度は少ない。しかし「うむ」でもそうであったように編者は、「つくる」の意味を十分にわかっていて「なる」と「うむ」とはことなる語として使い分けている。いいかえれば「つくる」の役割のちがいを承知して「つくる」を使用しているのである。

丸山も編者が「つくる」が「なる」はもとより「うむ」ともちがう働きとして使い分けられていることを認めてはいる。「吾与汝所作之国、未作竟」とイザナキはイザナミに向かっていうが、その前の段に「既生国竟、更生神」という叙述からも明らかであるとしている²⁰。ところが「修理固成」にしても「未作竟」にしても、その意味は creation ではなく、スサノヲの「宮可造作之地」「其地作宮坐」やオオクニヌシの「作堅此国」「吾独可能得作此国」の用例にみられるように、経営・整備・建設・修理を意味している。「つくる」という言葉が用いられているとしても「つくる」は建築・修理・加工のイメージに基礎をおいて creation の論理とは切れているとする。そこが『古事記』の「つくる」の問題であるということになる。丸山のいう creation の論理とはキリスト教系列の創造神話にみられる絶対者の無からの創造である。

たしかにキリスト教的絶対者による創造という意味での「つくる」は『古事記』に見出すことはできない。しかし丸山が編者が「つくる」を「なる」「うむ」という言葉と使い分けていることを認めているように、国作りのプロセスにおいては編者は「つくる」の重要な役割を承知して、巧みに「つくる」を配置して物語を構想しているように思われる。国作りのプロセスにおける「つくる」をとりあげ、そこに主体性、目的意識性の契機はないだろうか、また建築・整備といった地上での工作作業という意味にとどまらない、それ以上の創造性といった意味はないだろうか考えてみたい。国作りというプロセスにしたいがいながら、用例をおっていくと次のようである。

1 修理固成是多陀用弊流之国

「つくる」に関する最初の語は「修理固成」である。宣長がこの語がオオクニヌシとスクナヒコナの「為兄弟而、作堅其国」「二柱神相並作堅此国」と関連することを指摘しているように、ここでの「修理固成」はオオクニヌシの国作りとつながりあっていて、オオクニヌシによって「修理固成」は果たされるのである²¹。

これをどう訓じるか。「ツクリカタメナセ」(記伝)「ヲサメツクリナセ」(日本古典文学大系本)「ツクリカタメヨ」(古事記注釈)。「修理」を「ツクリ」と訓じる。あるいは「理」を「ツクリ」と訓じるように「ツクリ」と訓じられてきた。新編古典文学全集本では「ツクロヒカタメナセ」と訓じ、「ツクロヒ」を「あるべきすがたに整える」と解している。西宮一民は「ツクリ」という読みにたいして、海月のようにただよっているということは、国土がすでに存在していることであるから、それを「新しく作る」ということは文脈上ありえない。したがって「固め成せ」と訓じるのが正しく「このただよえる国を固めて完成せよ」という意味であるとして

いる²²。ちなみに日本古典集成本では「ヲサメカタメナセ」と訓じている。

西宮はここでの「修理」に「ツクリ」という訓はあたえるべきでないとする一方で、「修理」というと「修繕」の意味と考えがちであるが「新しく作る」という意味もあることにふれ、「修理」「修繕」とのみとる考えはあらためるべきだとも述べている。「修理」を「ツクロヒ」と訓じ「あるべきすがたに整える」ととるか「ヲサメ」と訓じ「国を固めて完成せよ」ととるかいずれにしても「整える」「完成せよ」には作るというニュアンスはふくまれている。また「あるべきすがた」「ただよえる国を固めて」にはたんなる修理・修繕・整備といった以上の原初の創造の意味がふくまれているといえるのではないだろうか。

2 吾与汝所作之国、未作竟

火の神を生んだために神避ったイザナミに会いに黄泉の国におもむいたイザナキは「吾と汝の作れる国、未だ作り竟らず」と語りかける。神生みの条で「既に国を生み竟りて」とあるから国生みは終わっているのであり、ここで「吾と汝作れる国」といわれている国作りは、イザナキとイザナミによる国生みだけでは終わらないということである。天つ神から命じられた「修理固成」がいまだ完了してない。国生み、神生みのほかにさらに国作りのためにしなければならないことがあることを、イザナキの言葉は示している。それがなんであるかはここに記されていないが、天つ神の子孫が天降る国を整えることであろう。それはオオオクヌシへと引き継がれる。

3 於葦原中国所有、宇津志伎青人草

黄泉の国の条ではじめて「葦原中国」という語が表れる。未だ作り竟えてない国とは、天つ神の子孫が天降る国「葦原中国」であることがここに示される。

4 為大国主神

オオナムジはスサノヲから大国主神となれと呼びかけられる。イザナキとイザナミが未だ作り竟えていなかった国作りを、オオナムジが引き継ぐことの宣言である。

5 每坂御尾追伏、每河瀬追撥而、始作国也

根の国から持ち帰った生太刀、生弓矢をもち八十神を追い立て、オオナムジは国の王となり、国を作る。イザナキ、イザナミが国生み、神生みして整えた国を政治的に統治することで、はじめて国を作ったということになるのである。イザナキの「未だ国を作り竟へず」の第1段階は、ここではたされる。

6 二柱神、相並作堅此国

オオナムジによって国は初めて作られるのであるが、さらに国として整えなければならないことがある。カミムスヒはオオナムジにその子スクナヒコナと兄弟となり、ともにこの国「葦原中国」をさらに堅固なものにせよと命じる。丸山はオオナムジとスクナヒコナの国作りを「作堅此国」「吾独何能得作此国」の用法からするとそれは経営・整備・建設・修理を意味していて本来の creation ではないとする。丸山はそれを補足説明するためにキリシタンの教理に接した日本人パテレンの言葉を『妙貞問答』から引用している。「其ハ作り出スニハアラデ、有物ヲ取テ、ナリ形チヲナホシ、サシ合スルノミ也、一デウスハ此天地ヲ下地モナク、(中略)有レト思召ス御一念ヨリ如此ニアラセ玉フハ、真ノ御制作者トハ是也」²³。creation とは二神のまぐあいによっておこなわれるのではなく、絶対者の無からの創造であるということである。

オオナムジとスクナヒコナの作り堅めるがどのようなことであるか『古事記』は記していない。二柱のおこなったことは地名の由來說話として『風土記』に記されている。『風土記』には、国を巡り、稲種や粟を蒔き、葉、温泉療法をもたらしたりといった記述がある。それらはあきらかに無からの創造ではない。しかしあることの由来、起源を語るということは、そのものごとの初めの時を語ることでもある。稲種、粟にしても農耕の起源を語る解釈できるなら²⁵、それ以前は農耕はおこなわれていなかったのを、オオナムジ、スクナヒコナがもたらしたということである。農耕がまったくなかった状態からある状態にした。なにもない状態を、ある

状態にする最初の作業がおこなわれたということである。究極の創造とはほどとおいが、宮を建てる、宮を修繕するという意味での作るとは、次元のことなる「作る」がおこなわれたということではないだろうか。

スクナヒコナは常世の国にわたってしまうのであるが、「二柱の神、相並に此の国を作り堅めき」につづいて「然くして後は」とあることからして、スクナヒコナとオオナムジの国作りは一段落したと考えられる。

7 吾独何能得作此国

スクナヒコナが常世の国にわたったことをオオナムジは嘆き悲しむのであるが、ふたりによる国の経営は一段落したのである。土地を開墾し、農耕を開始し、医療を整えるといった事業のほか、国としてあるためにはさらになさねばならないことがある。

8 能治我前者、吾、能共与相作成。若不然者、国、難成

嘆き悲しむオオナムジの前に海を照らして寄り来る神がある。その神は「能く我が前を治めば、吾、能く共与に相作り成さむ。若し然らずは、国、成ること難けむ」という。この神のいうことからして国作りのために神を祀ることを求めている。国作りとしては国の統治、国土の整備にくわえて国を守る神を斎き祀るという祭祀が必要なのである。国を守る神を祀ることで、国作りは完成するのである。あとは国譲りを待つだけである。

煩雑さをかえりみず国作りのプロセスを述べてきたが、「つくる」が国作りのキーワードとして要所要所に配置され、それが相互に関連しあっていることを確認するためにあえて（1）から（8）と書きだしてみた。このようにみえてみると「つくる」が重要な役割を担って各場面で使われていることがわかる。この一連の「つくる」は丸山の指摘するようにキリスト教的な絶対者の無からの創造という意味での「つくる」とはいえない。しかしながら宮を作る、宮を修繕するという次元での「つくる」ではない創世的、起源的な意味をおびた「つくる」もある。また自然発生的な「なる」という生成のなかにあつて、主体性と目的意識性をもった語として「つくる」は使われてもいる。自然の流れのままにという歴史意識において「つくる」は主体的、目的意識的契機をあたえているといえるのではないだろうか。

おわりに

『古事記』上巻における生成が、「自然増殖のオプティミズム」の発想に支配されていることは否定できない。しかしながら系譜の確実性、連続性を述べるためには「うむ」を必要とし、国作りにおいて「つくる」は中枢をなす働きである。おのずから成るという、非主体的な働きだけが『古事記』における生成ではなく、「うむ」「つくる」という主体性をふくむ働きもなくてはならない働きである。圧倒的な自然増殖のオプティミズムのなかにあつて、たしかに「うむ」「つくる」の使用頻度は少なく主流の発想ということではできないが、「つぎつぎになりゆくいきほひ」という歴史意識のなかにあつてそれを越えていく可能性を、「うむ」「つくる」そして自然現象の背後にあるなにものかを思念する発想に見出すことはできないだろうか。

注 『古事記』原文、訓読文は新編日本古典文学全集『古事記』をもとにしている。本居宣長『古事記伝』は岩波文庫版にもとづく。『記伝』と略して表記した。

-
- 1 丸山眞男講義録第四冊 解題 飯田泰三 334 p 岩波書店 1998年
 - 2 同上 67 p 71 p
 - 3 丸山眞男『忠誠と反逆』402 p ちくま学芸文庫 筑摩書店 2009年
 - 4 同上 363 p
 - 5 同上 369 p
 - 6 菅野雅雄「[生]と[成]の相違」『古事記説話の研究』桜楓社 1972年
 - 7 同上 68 p

- 8 新編日本古典文学全集『古事記』43 p 頭注 小学館 2012年
- 9 日本古典集成『古事記』36 p 頭注 新潮社 1995年
- 10 同上 43 p 頭注
- 11 同上
- 12 『古事記成立の背景と構造』141 p 笠間書院 2003年
- 13 『万葉集の語法の研究』塙書房 1972年
- 14 『忠誠と反逆』365 p
- 15 同上
- 16 『日本倫理思想史』(一) 95 p 岩波文庫 2011年
- 17 同上 102 p
- 18 『日本の思想』29 p 岩波新書 1968年
- 19 『忠誠と反逆』361 p
- 20 同上 365 p
- 21 新編『古事記』31 p 頭注
- 22 「古事記訓古二題」366 p 『国文学』第52号 1975年9月
- 23 『忠誠と反逆』366 p
- 25 日本古典文学大系『風土記』291 p 頭注 岩波書店 1967年